

奈良時代の濁音と漢音の米(ベイ)などについて

吉池孝一

一

日本語の濁音がどのようなものであったか。高山倫明(2012:75)によりますと、「中世以前の中央語においては、濁音に前接する母音が鼻母音化しており、濁音には必ず前鼻音が加わっていたらしいことが、種々の証拠からわかっている」としてポルトガル人ジョアン・ロドリゲスが書いた『日本大文典』と中国人羅大経の随筆『鶴林玉露』をあげております。

二

中世末期日本語の状態をしるしたロドリゲスの『日本大文典』(1604-08年)をみますと「D, Dz, Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである。例えば, Māda (未だ), Mídō (御堂), mádoi (惑ひ), nādame (宥め), nādete (撫でて), nído (二度), mādzu (先づ), āgiuai (味はひ), águru (上ぐる), ágaqu (足搔く), cága (加賀), fanafáda (甚だ), fágama (羽釜), など。」とあります<sup>1</sup>。この Māda (未だ) はマンダのような音で、mādzu (先ず) はマンズのような音。águru (上ぐる) はアングルのような音ということになります。もっともロドリゲスは“ン”で発音してはいけない、とも言うので、いま便宜的にンをはさみましたが、ロドリゲスの耳には、鼻にかかった母音すなわち鼻母音のようなものに聞こえたのでしょう。なお『日本大文典』中のポルトガル語の“ソソネーテ”ですが、山田昇平(2014)によると「響き」といった意味に解すべきだとします。

三

時代をさかのぼり北宋の『鶴林玉露』(1248年)の「日本国僧」の条に安覚という僧が話した日本語のうち20語を漢字で書き取った部分があります。やや長くなりますが引用します。

「余少年時、於鐘陸邂逅日本国一僧、名安覚、自言離其国已十年、欲尽記一部藏經乃帰、念誦甚苦、不舍昼夜、每有遺忘則叩頭仏前祈仏陰相。是時已記藏經一半矣。夷狄之人、異教之徒、其立志堅苦不退転。至於如此朱文公云、今世学者讀書尋行数墨備礼応数六経語孟不曾全記得三五板如此而望有成亦已難矣。其視此僧殆有愧色。僧言其国称其国王曰天人国王、安撫曰牧隊、通判曰在国司、秀才曰殿羅罷、僧曰黄榜、硯曰松蘇利必、筆曰分直、墨曰蘇弥、頭曰加是羅、手曰提、眼曰媚、口曰窟底、耳曰弭々、面曰皮部、心曰母児、脚曰又児、雨曰下米、風曰客安之、塩曰洗和、酒曰沙嬉」

<sup>1</sup> 土井忠生訳(1955)によります。

下線の語彙にカタカナを付すとつぎのようになります。黄榜は僧で御坊（オボウ）<sup>2</sup>、松蘇利必は硯（スズリ）とあります。松蘇利必の必について渡邊三男(1957)は衍字とします。分直は筆（フデ）<sup>3</sup>。客安之は風（カゼ）で、渡邊三男(1957)は安を衍字とするのですが、丁鋒(1988)はゆっくりと発音した風（カゼ）の音を書きとったため客安となったものであらうとします。また安は濁音ゼの前鼻音を標記したものともします。したがうべきでしょう。さて、オボウのオは黄、ボウは榜でしょうから、濁音相当の榜のまえに黄があります。この黄の当時の中央語の発音は *xuanŋ* に近いもので<sup>4</sup>、鼻音の-ŋ で終わる発音です。スズリのスは松、ズは蘇、リは利でしょうから、濁音相当の蘇のまえに松があります。この松の当時の中央語の発音は *siunŋ* に近いもので、鼻音の-ŋ で終わる発音です。フデのフは分、デは直でしょうから、濁音相当の直のまえに分があります。この分の当時の中央語の発音は *fuən* に近いもので、鼻音の-n で終わる発音です。カゼのカは客安、ゼは之でしょうから、濁音相当の之のまえに安があります。この安の当時の中央語の発音は *an* で、鼻音の-n で終わる発音です。これらの鼻音の-ŋ や-n は、当時の日本語の濁音の前にある鼻音を表記したと考えられています。

なお、『鶴林玉露』の漢字音の性質ですが、丁鋒(1988)は中国南方方言の贛語（江西省中部および北部、湖南省東南部、福建省西北部および安徽省・湖北省の一部）としますが、鼻音の-ŋ と-n については、中央語とそれほど異なるところはないと考えますので、いずれの方言によったとしても、濁音相当の前に鼻音を表わす成分があったということは認めてよいでしょう。

なお濁音の性質を論じることは、清音と濁音にはどのような違いがあったかという根本的な問題を論じることにもなります。したがいまして清濁の違いを同時に考えるのが筋ですが、そうしますと、筆者の能力を越えることとなりますので、この点については高山倫明（2012:79）に引用された早田輝洋氏の1977年の説を注で紹介することでご容赦いただきたくおもいます<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> この読みは朝山信爾(1937)参照。

<sup>3</sup> 丁鋒(1988)は「松蘇利必」の必は後続する筆を説明したものと解します。「筆曰必 分直」とあるべきで、筆の音読が必で、訓読が分直（フデ）であるとのこと。

<sup>4</sup> 中央語は楊耐思(1981)によります。以下の例も同様です。

<sup>5</sup> 清音と濁音にはどのような違いがあったか、高山倫明（2012:79）が紹介する早田輝洋(1977)には興味深い想定がしめされています。どういうものかと言いますと、清音は *p~b*、*t~d*、*k~g* であり、濁音は *mb*、*nd*、*ŋg* である、というのです。清音は語頭で無声音の *p*、*t*、*k* であり、語中で有声化して *b*、*d*、*g* としてあらわれ、両者に対立は無いとのこと。これについて、べつの言い方をすれば、当時の日本語の話し手と聞き手は、語頭の *p*、*t*、*k* と、語中 *b*、*d*、*g* は一つの音として意識していた可能性があるということです。それにたいして濁音の性質は前鼻音がある *mb*、*nd*、*ŋg* であり、*p~b*、*t~d*、*k~g* と対立をしていたということです。これについて、べつの言い方をすれば、当時の日本語の話し手と聞き手は、*p~b*、*t~d*、*k~g* と、*mb*、*nd*、*ŋg* の違いについて、鼻音の有無を重要な要素として意識し、話し聞き分けていたということになります。

次節では古代日本の濁音の前の鼻音成分について、それが文献の上でどこまでさかのぼることができるかということについて中村雅之(2013)の説を紹介します。

#### 四

さて、これまで高山倫明(2012:75)にあるところを確認しました。前鼻音の存在は、少なくとも『鶴林玉露』(1248年)のころまではさかのぼれそうです。問題は、さらにどこまでさかのぼることができるかということになります。この点について、中村雅之(2013)は、奈良時代の文献『日本書紀』(720年)までさかのぼることができるというのです。この『日本書紀』ですが、30巻のうち、巻14から巻21および巻24から巻27は、唐代長安の中国人の吟味を経て成立したことが、森博達氏によって明らかにされております。そして、この巻14から巻21および巻24から巻27を $\alpha$ 群と称します。それ以外の巻1から巻13および巻22から巻23までは、日本人によって作られた部分であり $\beta$ 群と称します。このように『日本書紀』は $\alpha$ と $\beta$ に分けられるのですが、中村雅之(2013)は、唐代長安人が関与した $\alpha$ 群の音訳のしかたに注目します。 $\alpha$ 群の歌謡をみると、マ行とバ行、ナ行とダ行の書き分けがないわけですが、この書き分けがないという事実の意味を考察し、日本語の濁音に前鼻音が存在したと解して矛盾なく事実を理解できるとします。やや長い引用となりますが次のとおりです。

「外国人である日本人が、非鼻音化の生じていた唐代長安音を聞いた場合には、明母字を日本語の「バ行」に対応させ、泥母字を「ダ行」に対応させることは自然なことであろう。しかし、中国人が日本語を聞いた場合はどうであろうか。日本語の「マ行」が[m-]、「バ行」が[b-]であったとすれば、明母/m-/を「マ行」に当てるのは自然であるが、「バ行」に当てるのは到底自然とは言えない。中国人の音韻観念が明母/m-/である以上、日本語の「バ行」[b-]に対応させる理由がないのである。しかし、この不自然さは、日本語の濁音が古くは破裂要素の前に鼻音要素を伴っていたことを考慮すれば、解消される。すなわち、「バ行」は純粋な[b-]ではなく、鼻音を伴った[mb-]あるいは鼻母音を伴った[b̥-]であり、「ダ行」も同様に[nd-]あるいは[d̥-]であった。そこで、 $\alpha$ 群の表記者は鼻音性を共通項として、明母/m-/を日本語の「マ行[m-]」にも、「バ行[mb-]」にも当てたと考えられる。泥母も同様である」。下線は吉池によります。

じつは、 $\alpha$ 群も $\beta$ 群も同様に、マ行とバ行、ナ行とダ行を明瞭には書き分けないのですが、 $\alpha$ 群の音訳は唐代長安人が行い、 $\beta$ 群は日本人が行ったという前提にたつならば、書き分けないという表面的な事実と同じけれども、事実が証する真実はそれぞれに異なるということになります。そして、 $\alpha$ 群においてマ行とバ行、ナ行とダ行を書き分けないという事実は、当時の日本語の“濁音”に前鼻音があったことを証すると考えてよい、ということになりそうです。

#### 五

ここで『日本書紀』の $\alpha$ 群と $\beta$ 群から実例をあげるとつぎのようになります<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 訳は日本古典文学大系 67,68『日本書紀 上下』(岩波書店)によります。

α 群：之哀世能 儼鳴理鳴彌黎麼 阿蘇寐俱屢 思寐我簸多泥爾 都摩陁氏理彌喻  
 シホセノ ナヲリヲミレバ アソビクル シビガハタデニ ツマタテリミュ  
 潮瀬の 波折を見れば 遊び来る 鮪が鰭手に 妻立てり見ゆ  
 潮の流れている早瀬の波の、高いうちかえしを見ると、泳いでくる鮪の傍に私の女  
 が立っているのが見える。(巻 16 歌謡 87)

β 群：波那具波辭 佐區羅能梅涅 許等梅涅麼 波椰區波梅涅孺 和我梅豆留古羅  
 ハナグハシ サクラノメデ コトメデバ ハヤクハメデズ ワガメズルコラ  
 花ぐはし 桜の愛で 同愛でば 早くは愛でず 我が愛ずる子ら  
 花のこまかく美しい桜の見事さ。同じ愛するなら、早く賞美せず惜しいことをし  
 た。わが愛する衣通郎姫（そとほしのいらつめ）もそうだ。(巻 13 歌謡 67)

α 群における濁音と鼻音にたいする漢字の対応はつぎのとおりです。

日本語の濁音	バ	←	麼m-
	ビ	←	寐m-
	デ	←	泥n-
日本語の鼻音	マ	←	摩m-
	ミ	←	彌m-
	ナ	←	儼 n-
	ニ	←	爾 n-
	ノ	←	能 n-

これは長安の中国人が、自分たちの鼻音は日本語のバ行ダ行とマ行ナ行に相当すると考えて意図的におこなった行為の結果です。意図的な行為の結果であるならば、長安人が自分たちの鼻音に対してどのような認識をもっていたかを問わなければなりません。長安人が鼻音を発音し聞き分けるときに意識する発音運動の理想（目的観念）はどのようなものであったか。有坂秀世(1940b)はこの発音運動の理想を“音韻観念”とし、具体的・客観的な音声と区別しました。ここでは音韻観念を{ }で、音声を [ ] でくくることにします。

さて、長安の中国人には、鼻音の{m-}や{n-}などを、[m~mb-] や [n~nd-] のように、破裂音 [b] や [d] を伴って発音する癖というか傾向があったことは、よく知られたことであり、吉池孝一 (2016) でも確認しました。日本の遣唐使は外国人の耳でこの音声 [mb-] や [nd-] を聞き取りバ行やダ行の音として日本に持ち帰り漢音として定着させました。それでは長安人はどういうつもりで鼻音を発音していたのでしょうか。その音韻観念は {m-} であったのか {mb-} に類する音であったのか、{n-} であったのか {nd-} に類する音であったのかということがまず問題となります。有坂秀世(1940a)にはつぎのようにあります。

昭和十二年、重慶出身の漆宗裳氏（東大言語学科卒業）が歸國されようとする前夜に一時間程對談の機会を得た際、同氏の米・你等の發音が殆どビ・ヂと聞えるのに氣

付いた。そこで、改めて発音してもらつてよく聴くと、その實は〔<sup>m</sup>bi〕〔<sup>n</sup>ʃi〕のやうな音である。(ところが、御當人は、自身の發音上のかかる特色に全然氣付いて居らず、完全な mi, ni であると主張して、梃子でも動かない。) この破裂音的要素は、民〔<sup>m</sup>bin〕寧〔<sup>n</sup>ʃin〕のやうに鼻音で終る音節に於ては、かなり弱くなる。さうして、馬〔ma〕魔〔mo〕那〔no〕のやうに開いた母音の前に立つ場合には、完全に消失してしまふのである。

これによりますと、当時の重慶の人たちの音韻觀念は米{mi}、你{ni}でありその音声は〔<sup>m</sup>bi〕〔<sup>n</sup>ʃi〕ということになり、これについては妥当なものであらうと思います。さらに、唐代長安におもむいた日本人や吐蕃人や西域渡來の僧が、長安の鼻音を聞いて破裂音を聞き取ったことについて、同論文の注の(11)には次のようあります。

吐蕃の音譯例自體の中にも、難'dan nan 耨'dog nog のやうに、發音上に多少動揺の存したことを思はせる例がある。又、〔m〕と〔mb〕の差異や、〔n〕と〔nd〕の差異は、唐代の秦音を寫したものと稱せられる慧琳一切經音義に於てさへも、反切の上には全然表されてゐない。恐らく、これら各二つの音は、支那人自身にとつては、相異なる音韻として意識されてゐたわけではなく、前に書いた漆宗裳氏の場合と同様に、同一音韻の二つの相異なる音聲的實現に過ぎなかつたものであらう。

これによりますと、唐代長安の鼻音の音韻觀念は{m-}{n-}であり、その音声は〔mb-〕〔nd-〕ということになります。音韻觀念が{mb-}{nd-}であつた可能性はないのかということにつきましては、もしも{mb-}{nd-}であるとしみますと、明瞭に二重子音の存在を「意識していた」ことになり、漢語の音韻史のなかに設定するのは困難です。もっとも{b-}や{d-}のやうに息が鼻に抜ける子音であるならば別ですが、そうしますと、これは{b-}{d-}と近い音となります。北方では後に{m-}{n-}となるわけですが、そうであるならば{b-}{d-}→{m-}{n-}は困難な道筋ではないでしょうか。唐代長安の鼻音の音韻觀念は{m-}{n-}であり、發音の仕方として破裂が伴う傾向があつた。しかし、けつして{b-}や{d-}を意識したものではなかつたとするのが穩当と考えます。つぎにこの穩当と思へる解釈によって先の例をながめてみようと思います。

先の例によりますと、日本語の濁音バに麼{m-}を、濁音ビに寐{m-}を、濁音デに泥{n-}を当てています。これは麼{m-}、寐{m-}、泥{n-}という音韻觀念をもつた唐代長安の人が、日本語の濁音のバ〔mba〕、ビ〔mbi〕、デ〔nde〕(この音韻觀念がどのようなものであつたかについては、また別の話で、ここでは外国人の耳に聞こえた音声のみを問題とします)のやうな發音を“外国人の耳”で聞き、鼻音の〔m〕や〔n〕に注目して、麼{m-}、寐{m-}、泥{n-}を当てたものと解すことができます。しかしながら、日本人がたとえ濁音のバやビやデの前に鼻音要素をともなつた發音をしたとしても、マ ma やミ mi やネ ne を意図して發音したわけではないので、麼{m-}、寐{m-}、泥{n-}を当てたこと自体は、外国人としての誤解の産物といわざるを得ません。ただし、日本人は、その当時、麼バ、寐ビ、泥デのやうに鼻音を濁音で読むという漢字音の習慣、すなわち“漢音”をすでに持つていたので、長安人の仕

業に対して異議はとなえなかったのでしょうか。なお、日本語の鼻音にたいして、長安人が自分たちの鼻音の漢字を当てるのは当然のことでしょう。

β 群はどうかといいますと、濁音バに麼{m-}を、濁音デに涅{n-}を、濁音ズに孺{n-系統})を当てています。これは、遣唐使が長安の都に行き、長安風の音を耳にして日本に持ち帰った結果です。当時長安の人たちは、鼻音を{m-}や{n-}のつもり【音韻観念】で発音したのですが、その発音の仕方は外国人の耳に [mb-] や [nd-] のように聞こえるものでした。それを日本の遣唐使は、外国人の耳で聞いて濁音と誤解して持ち帰り、固定したものが漢音ということになります。文化として固定した漢字音なので、理屈抜きにそのように覚えて使用した。その産物が β 群ということになります。

〈参考文献(発行年順)〉

- 朝山信爾(1937)「鶴林玉露の「黄榜」などについて」、『国語・国文』第7巻第12号:116-120。
- 有坂秀世(1940a)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」、『音聲學協會會報』第64号。『國語音韻史の研究 増補新版』東京:三省堂、1980:369-374。
- 有坂秀世(1940b)『音韻論』東京:三省堂
- 土井忠生 訳(1955)『ロドリゲス 日本大文典』東京:三省堂。
- 渡邊三男(1957)「中國古文獻に見える日本語—鶴林玉露と書史會要について—」、『駒澤大學研究紀要』15:155-163。
- 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野 晋(1965,1967)『日本書紀 上下』(日本古典文学大系 67,68) 東京:岩波書店。
- 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京:中国社会科学出版社。
- 丁鋒(1988)「《鶴林玉露》所記日本寄語反映的宋代贛語音韻」『球雅集—漢語論稿及琉漢對音新資料』(中国語学研究 開篇単刊第10号) 東京:好文出版。『如斯齋漢語史叢稿』(貴陽:貴州大学出版社、2010年)による。
- 森 博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』東京:大修館。
- 高山倫明(2012)『日本語音韻史の研究』東京:ひつじ書房。
- 中村雅之(2013)「対音資料研究法叙説—case1:日本書紀 α 群の音仮名(3)」、『KOTONOHA』125:15-19。
- 山田昇平(2014)「ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete”—濁音前鼻音記述をめぐって—」、『四天王寺大学紀要』第58号:335-350。
- 吉池孝一(2016)「漢音の米(ベイ)などについて」、『KOTONOHA』167:1-4。